

「ダウジングのすべて ～科学時代の活用術～」講演要旨

関西日本サイ科学会主催

平成28年6月18日（土）午後1時30分

於大阪科学技術センター701会議室

講師・和田高幸（日本ニュートラルポイント研究所代表）

古代からおこなわれてきた水脈探知術「ダウジング」の応用範囲は広く、都市（まち）づくり（「風水」）から埋蔵資源の発掘、災害時の生存者や破損水道管の発見などに役立てられています。遠隔透視（RV）やラジオニクスもダウジングからの派生技術です。近年では電磁波や放射線、気象衛星などによる可視化が進んでいますが、「感覚」を拠り所とした「ダウジング」は最も簡便で安上がり、しかも人によっては機械より正確という点で「科学技術」に勝っているかもしれません。左右脳の使い分けによって知覚脳力をアップするダウジングの活用術についてお話ししたいと思います。

古代からの伝統技術ダウジングは、柳の枝を使うなどして水や鉱脈を探す技術を指し、ラブドマンシー（棒占い）ともいわれています。古代から井戸掘りや埋蔵物を探す技術として知られており、空海が用いた錫杖もこれにあたるでしょう。ダウジングをする人をダウザーといいますが、イギリスの電話帳には「ダウザー」の項目もあり、職業的に行うプロ・ダウザーも少なからず存在しています。近年ではヴァーン・カメロンやビル・コックスがプロ・ダウザーの双璧でしょう。カメロンは、まだレーダーのない戦時中、潜水艦の位置を探る任務に従事しました。彼の発明した「オーラメーター」（米国特許）はビル・コックスに引き継がれ現在も入手可能です。

ビル・コックスは欧米、アジアなど十数か国の政府や企業の依頼により数百の水源地を探知、掘削に貢献しました。水源地探知では95%の的中率を誇っています。日本でも淡路島のY学園（1995）、京都府六十部町（現福知山市）のK食品工場（1997）における井戸掘削、有馬温泉域での水源地探知などの実績があります。

ダウジングをするための道具は特に問いませんが、地中や遠隔地から未知の情報を得るには、まず何を探すのか、ターゲットを明確にイメージしなければなりません。ダウジングの能力は、楽器演奏と同じように、個人差があるものの、その人の素質、努力、練習、経験などにより磨かれていきます。フィールドワークではオーラメーターが中心ですが、ワンド（木の枝）やL字ロッドを

使用することもあります。実地での作業を軽減する「マップ・ダウジング」では、ペンジュラム（振り子）が多用されます。

ダウジングの周縁（応用）技術としては、ラジオニクス、ラジエステシア（遠隔医療）、ホメオパシー（同種療法）、オーリングテストなどがあげられます。「風水」も同様です。有害な電磁波やガス、放射能、さらにピラミッド・パワーや人体オーラ（エネルギー場）の検知、水や食品の品質チェックなどにもダウジングは役立ちます。震災時には生存者の発見にも大きな手助けとなるでしょう。

ダウジングを成功させるには、「結果」を得やすくするための方法（質問形式）がたいせつです。脳が答えやすい質問をしながらターゲットを絞り込むわけですが、YES と NO がはっきりと区別できる質問にしなければなりません。

ときどき、脳が出す答が外れることがあります。この場合には「質問」の内容や手順を振り返ることが求められます。答がわからないときには、振り子やオーラメーターの動きがそれを示してくれます。

自分の脳を、とくに右脳と左脳の機能を分離的に、また五感の感覚をいかに使うかということが、ダウジングが成功するかどうかの決め手となります。

情報をもたらすのは右脳（無意識）で、これを解釈するのが左脳（意識）です。それらを統合する前頭葉は、直観の場所といえるかもしれません。

「カン」とか「第六感」とかいわれる脳のはたらきについては日常的に経験するものの、たとえば右脳が知っていることでも意識に上らないことが多いようです。ダウジングは、右脳に隠れている有用な情報を引き出す手段の一つで、予測・判断力を磨くトレーニングにもなります。

ダウジングとは、人間（生物）のもつ潜在的知覚能力の活用（ESP=Extended Sensory Perception）であって超能力「Extra Sensory Perception」ではありません。だれもがもっている能力で、鍛えればだれでもダウジングができるのです。では、未知の（顕在化されていない）情報を受容、収集するのは、どのような原理によるのでしょうか。

→脳は類似の音やパターン、事例に反応（共振、共鳴）しやすい

→意識にのぼらない（目に見えない）未知のエネルギー放射でも脳が感知している可能性がある

→必要とする情報を地球上のさまざまな情報源から右脳が探している
といった仮説がなりたちますが、ダウジングにより、脳や知覚器官が感知した

パターン（情報）が同種のパターン（波動）に共振、共鳴、さらに木の枝や振り子などに伝達されて意識に到達するのではないのでしょうか。「形態形成場理論」（ルパート・シェルドレイク）*がこの説を補強するでしょう。*「システムとシステムの間になんか空間的・時間的隔たりがあろうとも、そこに起きる形の共鳴の強さは必ずしも減じられない」「過去に存在した同じような形態の存在の影響を受けて、過去と同じような形態を継承する」

探していた情報が、たまたま本棚から落ちてきた本に記載されていたり、思わず口からでた言葉が現実になったりすることがあります。意味のある偶然の一致といわれる「シンクロニシティ」（ユング）ですが、すでに右脳が探知した情報が、“偶然を装って” 私たちに伝えられているだけという見方もできます。

さて、知覚能力を向上させるには、左右脳の機能を分離的に使うのが有効です。

かんたんなトレーニングとして、利き目や利き手をスイッチしてみましょう。たとえば右目をマスキングして仕事をするとか、靴を履くときにはいつもと反対の足からにするなど、無意識に行っている日常の生活習慣をかえてみるのです。つまり、固定観念を打破することが、感知能力を高め、情報処理能力を加速するというわけです。そうすることで、未知の資源や存在にアプローチすることが容易になるのです。

以上